

終助詞「よ」「ね」の 「語りかけタイプ」と体の動き

今 村 和 宏

1. はじめに

終助詞「よ」と「ね」の意味や機能の違いは何か。「ね」は話し手と聞き手の情報・判断の一致、「よ」はその不一致（対立）を前提にするとする見方や、「ね」は話し手が聞き手に判断や意見の共有を確認・要求し、「よ」は話し手が聞き手の知らない（認識が不十分な）情報や判断を提示するという立場などが広く認められている。

たしかに、これらの説明は、「あの人、もう帰りましたね。」と「あの人、もう帰りましたよ。」との違いを説明するのに有効であり、日本語教育の現場でも役立っている。だが、このような分析的な解説では日本語学習者には伝わりきらない何らかの感覚があるのではないか。それを何とか伝え、「よ」や「ね」の自然な使用につなげたい。その方法を模索する中で次のような例にぶつかった。

(1) A：あの人のお考え方、変ですね。

B：変ですよ！ まったく理解できません。

ここでAの発話中の「ね」については、上記の「情報、判断の一致」でも、「判断や意見の共有を確認・要求」でも説明がつく。しかし、Bの発話中の「よ」は理解しづらい。Bは明らかにAに同意している。判断が一致し、意見を共有しているのに、「ね」でなく「よ」を使っている。そのうえ、同意の気持ちが強ければ強いほど、「変ですね！」より、「変ですよ！」を使って聞き手に語りかけるのが自然に感じられる。まさにその事実が、上記説明の不備を浮き彫りにしている。

では、聞き手に対するどのような感覚と発話態度（「語りかけタイプ」⁽¹⁾）が、こ

こで「よ」を選ばせるのか。その選択基準を明らかにし、多様な使用例を矛盾なく説明することが本稿の目的である。その際、「よ」と「ね」の根源的な語感と聞き手に対する発話態度を体の動きで顕在化し、日本語学習者に迫体験してもらうための方法も模索する。

2. 先行研究

先行研究では、客観的な事実関係が「よ」や「ね」の使用条件だという見方が優勢で、終助詞「よ」を「ね」の対極に位置するものとして規定する研究が多い。しかし、事実関係だけでなく発話態度や表現意図を重視した立場も増えつつある。

2.1 対立する客観的な事実や判断で説明する立場

- 「ね」は話し手と聞き手の情報、判断の一致、「よ」はその不一致を前提（大曾 1986）
- 「ね」は、話し手が有する知識や意向が聞き手の持っていると想定される知識や意向と一致する方向にある場合に、「よ」は対立する方向にある場合に使う（益岡 1991）
- 「ね」は内容が話し手にとって「非独占情報」とであると判断した場合に、「よ」は「独占情報」とであると判断した場合に使う（大浜 1997）

これらは、聞き手と情報や判断、知識や意向のあり方が一致し、「非独占情報」と判断しているのに、(1) の B が「よ」を使っていることを説明できない。

さらに、客観的な事実や判断が同じなのに、「よ」も「ね」も使わない場合と、「よ」や「ね」が使える場合があることを説明するにも無理がある。(2) でケーキができていないと A が判断している客観的事実を前に、B は「よ」も「ね」も使わない平叙文で答えることも、「よ」をつけることも、「ね」をつけることも可能である。

(2) A：ケーキ、まだ、できないんですか。

B1：もうできています。 B2：(あっ、) もうできていますね↓。

B3a：もうできていますよ↓。 B3b：もうできていますよ↑。

B1は標準的な平叙文の下降イントネーションなら、単に「もうできている」という内容をありのままに述べているのに対し、B2は質問を受けて探索した結果、「もう焼けている」という事実を発見し、それを聞き手と共有している。さらに、その情報を言い切りの形で相手に突きつける下降調のB3aに対し、上昇調の「よ」をとまなうB3bは同じ情報を相手に差し出して何らかの反応を促しているような余韻を醸し出す。このように、1つの客観的事実に対して、Bに少なくとも4つの選択肢があることを見れば⁽²⁾、客観的事実関係が「よ」や「ね」の使用・不使用を決定するわけではないのは明らかであろう。

2.2 聞き手に対する発話態度（伝達態度）で説明する試み

- 「ね」は話し手の発話が聞き手を取り込もうとするのに対し、「よ」は話し手の発話が聞き手に関わりなく（一方的に）伝えられ、聞き手に何らかの変化や行動を促そうとする（伊豆原 1993, 伊豆原 2001）
- 「ね」は、「当該の発話を、マッチする特定の文脈とリンクせよ」という聞き手に対する操作指令であるのに対し、「よ」は「当該の発話を関与的なものとして登録せよ」という操作指令である（金水 1993）
- 「よ」は聞き手の注意を喚起する「話し手の聞き手への呼びかけ」（曹 2000）
- 「よ」は、その文が表す内容を、聞き手が知っておくべき情報として示し、「ね」はその文が表す内容を、心内で確認しながら、話し手の認識として聞き手に示したり、確認を求めたりするほか、単に相手を意識していることを伝達する。（日本語記述文法研究会 2003）

これらは、「よ」や「ね」が聞き手に対する発話態度に関わっていることを明確に述べている点が評価でき、筆者も同様の立場をとる。ただ、その中身を見てみると、それぞれに難点がある。伊豆原の「聞き手に関わりなく（一方的に）伝える」という定義では、「よ↓」と「よ↑」を矛盾なく説明しづらい。金水の「関与的なものとして登録せよ」の定義は切り分けの基準として曖昧であり、曹の「注意を喚起する話し手の聞き手への呼びかけ」がどんな内容なのかもわかりにくい。日本語記述文法研究会の「知っておくべき情報として示す」も、聞き手にとって既知の内容を伝えるときの伝達モダリティを説明しきれない。また、(1)のBが「ね」ではなく「よ」を使っていることはどの説でもやはり説明できない。

3. 感情に左右されながら選びとる発話態度

冒頭の会話(1)では、A「ね」B「よ」という組み合わせである。これにA「ね」B「ね」、A「よ」B「ね」、A「よ」B「よ」という組み合わせを加えて、以下4例⁽³⁾を並べ、想定しうる文脈と表現意図を詳しく比較検討する。その中で、特に、話し手の感情の動きや聞き手に対する発話態度が「よ」や「ね」の選択に及ぼす影響を分析する。

- (3) A:あの人の考え方, 変ですね。
 B:変ですね。まったく理解できません。
- (4) A:あの人の考え方, 変ですね。
 B:変ですよ! まったく理解できません。
- (5) A:あの人の考え方, 変ですよ!
 B:変ですね。まったく理解できません。
- (6) A:あの人の考え方, 変ですよ!
 B:変ですよ! まったく理解できません。

(3) から (6) のそれぞれについて、どのような場面が思い浮かぶかを調べるために、母語話者12名にアンケートをとってみた⁽⁴⁾。

予想通り、(3) がもっとも自然な(標準的な)やりとりだと12名全員がすぐさま答えている。「話し手と聞き手の情報・判断の一致」とか「話し手が聞き手に判断や意見の共有を確認・要求する」のが「ね」の使用条件だとする理論にしたがえば、両者の文に「ね」をつけるのがもっとも素直で納得がいく。

次にわかりやすい会話との判定が多かったのは(5)であるのも予想どおりである(12名中10名)。ただし、そこで想定される文脈は、多くの場合、Bが同意してくれるかどうかわからない状況でAが自分の判断をストレートに相手に知らしめるというものである(上記10名のうち8名)。その場合、最後に上がるイントネーションの「よ↑」になる。

だが、筆者が想定するのは、両者が意見をすでに共有している文脈である。そこで、「2人が意見を共有していることをAが知っている状況だとしたら違和感を抱くか」と尋ね直してみた。

その場合、「あの人の考え方が変だ」という認識をBが持っていたとしてもその認識が不十分だとAが考えたなら、その認識を改めさせるために「よ」を使うというのが一般的な説明である。たしかに、そのように説明がつく場合が多く、上記10名中6名は自力でそうした文脈に辿り着いた。だが、注目すべきは、Bの認識が不十分だと思わなくても、Aは「よ」が使える場面があることであるが、それを自分で具体的に想定できたのは10名中2名しかいなかった。その場面とは、認識の内容も度合いも一致しているとわかっていても、それでも自分の考えを相手にぶつけないと思ったときのことである。その際、下降調の「よ↓」がつく。あの人の考え方が変だという判断で気持ちが高ぶって感情的になっているならそれが自然な表現ではないかと提起してみると、12名中11名は納得できるとの反応が返ってきた⁽⁵⁾。

「自分の考えを相手にぶつけない」と思うには2つの可能性がある。1つは、自分が以前から思っていたことを、やっと相手の口から聞いて、「やっと言ってくれましたか」という気持ちで興奮して持論をぶつけている場合(11名中8名)である。もう1つは、今まで何度も同じことを言ってきたのだが、それでもなおその同じ考えを相手にぶつけずにはいられない心境(11名中7名)⁽⁶⁾のときであろう。文頭に「とにかく」を補って読み返せば、そうした文脈が想定しやすくなり、意見を共有していても「よ」を使いたくなる心境に納得がいくのではないだろうか。

冒頭の会話と同じ(4)も、自然な会話だとの判定が多かった(12名中8名)。Aは、判断や意見の共有を確認・要求する気持ちで「ね」を使っている。それに強く賛同するBは、「変ですよ！」でその強い感情をAにストレートにぶつけ返して、「まったく理解できません」へと気持ちをさらに高めている。そうした文脈がイメージしやすいとの回答が上記8名中6名から出ている。また、「あの人の考え方が変だ」という意見に賛同する気持ちが強ければ強いほど、「よ」をつけない選択肢が想定できないという点でも一致が見られた。なお、この場合、言い切りを表す下降調のイントネーションのみ可能である。

(6)の会話についての判定は大きく分かれた。両者が「よ」を使う会話には違和感を抱く日本語母語話者がいる(12名中3名)。これは日本人同士の会話ではないと解釈する人すら存在する(同1名)。だが、そのような人に対して、これが仕事上の知り合い同士が酔っ払った席で交わした会話だと説明すると、「それならピンとくる！」との答えが返ってくる。一方、「盛り上がって、「そうだ！そうだ！」と言いたくなるような場面で本音をぶつけ合っているなら、これが一番自然な会話だ」というコメントが12名中7名から出てきた。

以上、話し手と聞き手が認識を共有しているという客観的事実が同じでも、聞き手に対する発話態度によって、両者とも「ね」を使う典型的な(3)の会話だけでなく、(4)や(5)、(6)など、様々なバリエーションがありうる事が確かめられた。しかも、この種の議論で軽視されがちな感情が聞き手に対する発話態度を大きく左右しつつ、最終的には、話し手に選択の余地が残されている点が重要である。そこから見えてくるのは、以下のような人間像である。

- 客観的事実や感情に制約されながらも発話態度を主体的に選びとる話し手

では、「よ」と「ね」の発話態度とはどんなものなのか、「語りかけ度」と「語りかけタイプ」の観点から明らかにしたい。

4. 「よ」と「ね」の「語りかけ度」と「語りかけタイプ」

人が何かを話しているとき、その話し手は、程度の差こそあれ、聞き手に語りかけているが、その度合いは様々である。聞き手をほとんど意識せずに話を進めることも、聞き手を意識しつつも冷静に事実のみを綴ることも、話す内容をはっきり聞き手に投げかけて反応を見ようとすることもある。今村(2008)では、文末の「のだ」や「わけだ」が、文の「語りかけ度」を高める効果があることを分析した。「よ」も「ね」も同様に「語りかけ度」を高める機能があると考えられる。

白川(1992)では、「よ」の機能を「それが付加された文の発話が聞き手に向けられていることを、ことさらに表明する」と定義することによって、「よ」をめぐるさまざまな現象が統一的に説明できると指摘している。

筆者は、この定義が、発話の聞き手への向けられ方が「ことさらに」であることを明示している点を高く評価したい。それは、「よ」の使用によって、「語りかけ度」(話し手が聞き手に語りかける度合い)を高めていることを示している。これにより、本来「聞き手目当て」でない文に「よ」を付加したとき、もっともその効果を発揮する一方、聞き手が最初から想定された文としての丁寧体では、「よ」が不可欠ではない事実をわかりやすく説明することに成功している。たとえば、語りかけ度がもともと低い「これはおもしろい」に「よ」をつけて「これはおもしろいよ」と言えば、明らかに語りかけ度が高まったことが実感できるが、最初から聞き手への語りかけが前提とされる「これはおもしろいです」だと「よ」の追加による

効果は大きくない。

ただ、そのような程度の問題（「語りかけ度」）だけでなく、「聞き手に対して、発話がどのように向けられているのか」という質的な問題（「語りかけタイプ」）については、はっきり文字化されていない。しかし、「ね」もやはり文の「語りかけ度」を高める機能を持っている以上、「語りかけタイプ」を明らかにしないかぎり、「よ」の根源的な機能を特定することはできない。その必要性を自覚してか、白川（1993）では、上記の定義を「その発話が確実に聞き手の耳に入るように聞き手の注意を喚起する」とことと言い換えることで、「語りかけタイプ」に迫ろうとしている。

今村（2008）では、文末表現の「のだ」と「わけだ」について、「語りかけタイプ」の分析的な記述だけでなく、視覚化した直感的な記述を通して、「のだ」使用の具体例の多くを統一的に説明し、日本語学習者にその語感を追体験させる方法を提案した。

同様に、「よ」についても、母語話者としての内省をもとに、「語りかけタイプ」（標準形）を直感的に定義してみた。

- 「よ」は、それが付加された文の内容を聞き手にまっすぐ差し出す。

ここで、「まっすぐ差し出していることを表明する」とは表現しないのにはわけがある。「表明する」だと「差し出す」ことを客観的にとらえなおしてからそれを聞き手に知らせているという間接性が前面に出る。しかし、母語話者としての内省を突き詰めてみると、「よ」には、そうした間接的・分析的なとらえかたではしっくりこない何かがある。それは、話者が「よ」を発する瞬間に「差し出す」感覚そのものを感じているような、あるいは「差し出す」行為自体を追体験しているような直接性である。それを損なわないようにするには、「まっすぐ差し出す」という直感的な表現の後には、何もつけないのがふさわしい。

なお、「まっすぐ差し出す」と言っても、「よ」には3つのバリエーションがある。標準パターンは、下降イントネーションの平叙文の文末と同音程かごくわずかに上がる「よ→」⁽⁷⁾であり、聞き手の胸元まで手をまっすぐ差し出す感覚である。そうした標準形のバリエーションとしての明らかに上昇調の「よ↑」では、聞き手の喉元の方に向かった手先が最後に軽く上がり、表情は相手の反応を待つ（促す）ような笑顔である。これらに対して、下降調の「よ↓」の場合は、話し手の立ち位置は

安定した状態で、手を聞き手の下方へ差し出す動きで、顎を軽く引き表情は固い。

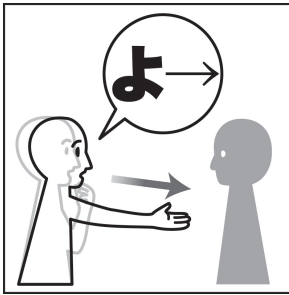


図 1a：平坦調の「よ」

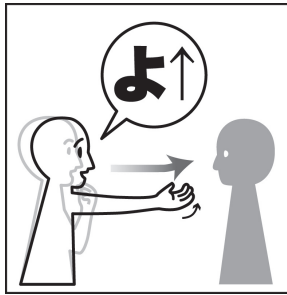


図 1b：上昇調の「よ」

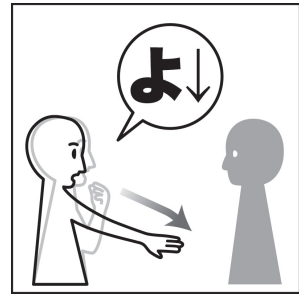


図 1c：下降調の「よ」

では、「ね」の「語りかけタイプ」はどんなものか。それは、「よ」のようにまっすぐ聞き手に命題を差し出すのではなく、文の内容を共に抱え込むような語りかけだろう。標準タイプの上昇調の「ね↑」は、向き合って対話している位置から、聞き手の脇に寄り添って同じ方向を見る体勢へ向かうような面持ちで文の内容を共に抱え込む。少し上方に傾け気味の笑顔は、相手の意向をしっかりと確認する表情になる。

なお、「ね」にも標準形の「ね↑」だけでなく、「ね→」と「ね↓」がある。平坦調の「ね→」は、聞き手の方に微妙に上半身を傾け、相手の共感を追体験しているかのような面持ちで文の内容を共に抱え込む。下降調の「ね↓」は、言い切りの印象を醸し出し、揺るがない自分の立ち位置に相手を取り込む感覚で、表情は固い。

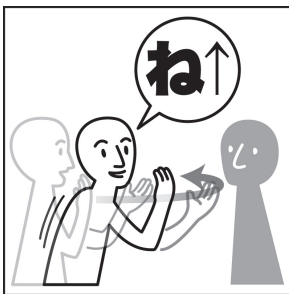


図 2a：上昇調の「ね」

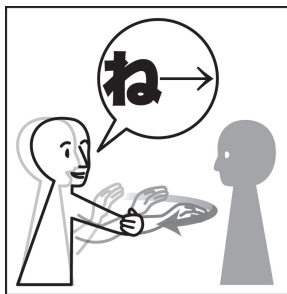


図 2b：平坦調の「ね」

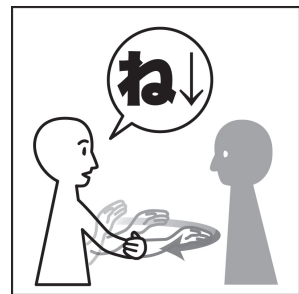


図 2c：下降調の「ね」

以下では、「よ」と「ね」の「語りかけタイプ」をこのように仮定してみることで、「よ」と「ね」の用法のさまざまな側面が矛盾なく説明可能かどうかを検証する。

5. 感情に左右される「語りかけタイプ」が最後のスクリーニング

例（7）は、友人同士でワインを楽しみながら交わす会話として典型的なものであろう。Bは、相手と評価を共有しているサインとして「ね」をつけている。

（7） A：このワイン、なかなかおいしいでしょ。

B：ええ、おいしいですね。／うん、おいしいね。

しかし、同じく友人同士でワインを楽しむ場面でも、相手Aがワイン通の自分の評価を心配そうに待っていると思えば、「ええ、おいしいですよ。」（「うん、おいしいよ。」）とBが答えたくなくても不思議はない。その場合、「よ」を付加するBの表現意図には、以下の2つの心理のいずれかが働いていると考えられる。

- 相手より優位にあるエキスパートとしての評定を相手に生のままで差し出す
- 相手が期待している答をまっすぐ差し出して相手を安心させる

ところが、ここでさらに興味深いのは、相手が自分のエキスパート評定を心配そうに待っていると思ったとしても、Bが「ね」で答える選択肢が残されていることである。「おいしい」という事実を「生のままで差し出す」ことより、同じ方向を見ていること（共感）を表現することが優先されれば、「ええ、（おっしゃるとおり）おいしいですね。」となる。共感を優先するのは、相手のワインを見る目を高く評価しているためとも、自分が専門家ぶりたいためとも考えられる。

相手の眼差しに無関心で適当なコメントを言うだけに留めたい人はどちらで答えるだろうか。その場合は、相手にストレートに自分の意見を差し出す気持ちにはならないので、「よ→」や「よ↑」でないのは明らかである。そのうえで、一応相手の発言に合わせる最低限の配慮があれば、相手に言い切りのコメントを差し出す「おいしいですよ↓」となるか、意見を共有するフリの「おいしいですね↓」となるが、それすらなければ、さらに素気ない「おいしいです」⁽⁸⁾に落ち着く。

「おいしいのは認めます。でも……」と素直な気持ちで譲歩するなら、まず「おいしいですよ↑」と譲歩部分は聞き手の方にしっかり差し出して注意喚起する必要がある。しかしそこで、不満げな譲歩の気持ちを表現するなら、「おいしいですよ↓」と下降調のコメントを聞き手の下のほうに吐き捨てるようにまっすぐ差し出すのがふさわしいだろう。

以上、類似の状況下で、感情の動きに直結した「語りかけタイプ」によって「よ」と「ね」のどちらを選ぶか、また、どのイントネーションを選ぶかが巧みに使い分けられることがわかる。ここから、客観的な事実関係が「よ」や「ね」の使用のあり方を決めるのではなく、感情に左右されながら話し手が主体的に選ぶ「語りかけタイプ」が最後のスクリーニングとして機能していると筆者は考える。しかも、その様子が体の動きを手掛かりに直感的に理解できるのである。

6. イントネーションと体の動きで「語りかけタイプ」を学習者に伝える

以上のような感覚をともなった「よ」や「ね」の「語りかけタイプ」を体の動きで視覚化し、学習者自身に体の動きと気持ちを追体験してもらいたいと思い、筆者は数年前から、中上級の学習者を相手に様々な方法を試みてきた。

その結果、図 1a～c、図 2a～c のようなジェスチャーと表情で、文脈に沿った感情と語りかけタイプと「よ→」「よ↑」「よ↓」「ね↑」「ね→」「ね↓」の対応関係を示すと⁽⁹⁾、学習者からは、それぞれの終助詞を使用するときの感覚がつかめたとの感想が聞かれ、表現意図に即した自然な発話が促進されるようになった。

まず、「よ」の語りかけタイプ（標準形）を明らかにする。友達同士の会話だという設定で、窓の外を見て、独り言のように「山田さんが帰ってきた」と言うときは、手は胸に当てたままにする。その際、聞き手には山田さんは見えない。次に、「山田さんが帰ってきたよ→」では、図 1a のように、聞き手である学習者の胸元に向かって、手をまっすぐ差し出す。その際、最初に胸に当てた手の中に「山田さんが帰ってきた」というメッセージを抱えていて、そのメッセージを手の動きとともに学習者に差し出したことを知らせて、「よ→」の感覚を伝える。

以上の標準タイプのバリエーションとして、上昇調の「よ↑」を付加した「山田さんが帰ってきたよ↑」では、図 1b のように、聞き手の喉元の方に向かった手が最後に軽く上がり、表情は相手の反応を促すような笑顔であることを強調する。

以上2種類の「よ」に対して、下降調の「よ↓」は大きく違う。目を閉じて神経を声に集中してもらったところで、きっぱりと言い切りの「山田さんが帰ってきたよ↓」を発話して、どんな感じがするか尋ねる。「怒っている」とか「不満な感じ」などと答える学習者がいるのを確かめてから、図 1c のように、安定した立ち位置で顎を軽く引き、固い表情で聞き手の下方へ手を差し出す。そのうえで、怒りや不満を表す以外に、聞き手の反応を遮る態度や聞き手の反応に対する無関心を表わす

場合もあることを告げる。

「ね」の標準形を付加した「山田さんはもう帰りましたね↑」は、図 2a のように、聞き手の立ち位置に大きく歩み寄って、その判断を確認しながら、同じ視線で文の内容を共に抱え込む態度であることを示す。これは、中上級の学習者ならわざわざ説明するまでもなく了解済みであることが多いが、適切なイントネーションで発話できるかを再確認する。そのうえで、平坦調の「ね→」を付加した「ここは暖かいですね→」は、図 2b が示すように、上昇調の標準形ほど聞き手に歩み寄らないが、文の内容をやはり共に抱え込み、軽く情報や意識を共有する感覚であることを追体験してもらいながら、適切なイントネーションを確認する。

「よ」の場合と同様、下降調の「ね↓」は他の 2 種類と大きく趣が異なる。話し手は自分の立ち位置を譲ることなく、聞き手を自分の方に取り込み、異論を挟ませない態度である場合すらあることを告げる。

以上のように、「よ」と「ね」の様々なタイプについて、「イントネーション」、「体の動きや表情」、「意味やニュアンス」の三者の対応関係に整合性が認められることが意識化されると、それぞれのニュアンスが直感的に身についていくと期待できる。

ただし、ジェスチャーなしでもわからなくてはならないので、次のステップとしては、目を閉じていても、同様のニュアンスが感じられるかどうかを確認してもらう。

これらの終助詞の使用感覚が一定程度、理解できたと思われる段階で以下の例文で B の下線の空白に「ね↑」「ね→」「ね↓」「よ→」「よ↑」「よ↓」のうちで、どれが入り得るかを尋ねるようにしている。

(8) A：ここでちょっと休みませんか。

B：いいです____。私もそうしようかと考えていました。

すると、多くの学習者が、明らかに上昇調の「ね↑」と明らかに下降調の「よ↓」は不適切であることにすぐ気づき、「ね↓」や「ね→」、「よ↑」や「よ→」が適切であるとの答えにも辿り着く⁽¹⁰⁾。さらに、体と心の動きで実感しながら、語りかけタイプとの対応を通して、なぜそれらを選んだかを説明できる場合も少なくない。

そこまでくると、「よ→」「よ↑」「よ↓」「ね↑」「ね→」「ね↓」の語感を学習者が直感的に身に付けた可能性が見えてくる。今後は、(8) について事前と事後のテ

ストを実施して、数量的な差を確認する実験が必要だろう。また、中上級の学習者だけでなく、初級段階の学習者でもこの方法が有効かも検証したい。

7. まとめと今後の課題

本稿で述べてきたことは、以下のようにまとめられる。

- (1) 話し手と聞き手が情報、判断を共有するか否か、命題が話し手にとって「独占情報」とであると判断できるか否かなど、対立する客観的事実で「よ」と「ね」の使い分けが決定されるという説明には限界がある。
- (2) 同じように認識を共有していても、聞き手に対する発話態度によって、「よ」と「ね」の使用について、様々な組み合わせがあり得る。
- (3) 話し手は、客観的事実だけでなく、感情に左右されながらも、発話態度を主体的に選び取ると考えられる。
- (4) 「よ」も「ね」も「語りかけ度」を高める。
- (5) 「よ」の発話態度は、それが付加された文の内容を聞き手にまっすぐ差し出す「語りかけタイプ」として、「ね」の発話態度は、文の内容を聞き手と共に抱え込む「語りかけタイプ」として、直感的に記述できる。
- (6) 「よ」も「ね」も標準タイプ以外に、そのバリエーションがあり、標準タイプから派生した整合性あるジェスチャーとして直感的記述が可能である。
- (7) 「よ」や「ね」の使用実態の多くは、「語りかけ度」「語りかけタイプ」やその発話態度を使って矛盾なく説明できる。
- (8) 客観的な事実関係や感情に左右されつつも、話し手が主体的に選ぶ「語りかけタイプ」が、「よ」や「ね」の使用のあり方を決めるための最後のスクリーニングとして機能する可能性が高い。
- (9) 「よ」と「ね」の「語りかけタイプ」は、イントネーションを含め、体の動きで学習者に迫体験させられれば、そうした直感的理解を通して、使い分けがむずかしいと言われるこの2つの終助詞の習得が促されると期待できる。

なお、「よ」と「ね」は、本稿では単純化のために、標準タイプ以外に2種類を示し、計3種類について議論してきたが、イントネーションと体の動きの度合いは、実際には連続的に変化し得るもので、3種類に限られるわけではない。そのさじ加減は、感情や表現意図により微妙に制御されうると考えられる。

今後は、「よ」や「ね」の音調のさまざまな度合いによって、聞き手が受ける印象がどのように変化するかを明らかにしたい。また、本稿で示唆された、体の動きで追体験する「語りかけタイプ」の学習効果を数量的に検証すること、「よ」と「ね」の複合形と考えられる「よね」、さらには、「わけだね」「のだね」「わけだよ」「のだよ」などの「語りかけタイプ」について議論することが必要であるとする。

注

1. この用語は、今村（2008）ではじめて使用された。
2. 後に見るような、上昇調の「よ」に近い平坦調の「よ」も挿入可能かもしれないが、ここでは簡略化のために省略する。
3. 比較の便宜のため、冒頭の会話を（4）として再掲してある。
4. 内訳は以下のとおり。日本語教師3名、それ以外の者9名。女性7名、男性5名。20代2名、30代2名、40代4名、50代3名、80代1名。
5. そのように気持ちの高ぶったAの「変ですよ！」に対して、「ね」で同意を示すBの反応は順当なはずだが、「まったく理解できません」という強い意見表明へと続く表現としては物足りないというコメントが2名からあった点が注目に値する。Aが盛り上がっているところでそっけなく「変ですね」と流したBが、その直後に「まったく理解できません」と続けるのには違和感があると言う。これは、気持ちが高ぶった者同士なら（6）が一番自然だという考えを強く補強する意見で、非常に興味深い。
6. すぐ上の場合の答えと重複回答あり。

7. 「よ→」を緩い下降調と認識する母語話者も多い。それは、たとえば、以下の平叙文「帰ってきた」に「よ→」がついたBの答えでは、全体のイントネーションが明らかに下降調なので、最後の「よ→」の部分では平坦調か逆に微妙に上昇調になっているのを感じにくいためと解釈できる。

A：山田さん、もうかえってきた？

B：かえってきたよ。

8. このような例は、「不自然」、「座りが悪い」、「円滑な会話での受け答えとして不適切」として、一般には非文か「??」とされ、分析の対象外となる。しかし、母語話者による現実の会話では、このような発話もじっさいには存在する。しかも、それが誤用ではなく、その場の感情にふさわしい発話態度を話し手が選び取った結果と思われる場合がある。ただ、日本語学習者においては、表現意図とは無関係にそのような「不適切な」表現様式をとってしまうことがあるので、その感覚をも伝えることを目指したい。
9. 「よ→」は実際には、下降イントネーションの平叙文の文末につけた場合、わずかに音調が上がっていることがほとんどなので、（注意喚起を目的とする）明らかな上昇調の「よ↑」と最初は区別せずに「よ↑」としてまとめて扱い、「よ↓」との対比を際立たせる。その上で、上昇調の「よ」のバリエーションとして、イントネーションと体の動き、表情などに対応させて、さらに2種類を区別するようにしている。

10. その際、文字だけに比べて、イントネーションを含む音声を聞かせた場合、さらには、音声に加えてジェスチャーを示した場合には、正解率が顕著に上がった。この事実は、音調とジェスチャーに連動した形で「よ」「ね」の語感を知らせる意義の証左である可能性が高い。ただし、最終的な判断を下すには、音調や顔の表情などに、正解を直接学習者に知らせるようなヒントが含まれていなかったかどうかの検証が必要かもしれない。

参考文献

- 伊豆原英子（1993）「「ね」と「よ」再考「ね」と「よ」のコミュニケーション機能の考察から」『日本語教育』80号、日本語教育学会
- 伊豆原英子（1993）「終助詞「よ」「よね」「ね」の総合的考察「よね」のコミュニケーション機能の考察を軸に」『日本語・日本文化論集』第1巻
- 伊豆原英子（1994）「感動詞・間投助詞・終助詞「ね・ねえ」のイントネーション」『日本語教育』83号、日本語教育学会
- 伊豆原英子（2001）「終助詞「よ」「よね」「ね」再考」『愛知学院大学教養部紀要』第51巻第2号
- 犬飼隆（1989）「低く短く付く終助詞「ね」」『講座日本語と日本語教育第1巻日本語学要説』明治書院
- 井上優（1997）「「もしもし、切符を落とされましたよ」終助詞「よ」を使うことの意味」『月刊言語』、1997年2月号
- 大浜るい子（2004）「終助詞「よ／ね」の機能再考——文脈指定機能を中心に」『広島大学日本語教育研究』第14号
- 片桐恭弘（1995）「終助詞による対話調整」『月刊言語』、1995年11月号
- 金水敏（1993）「終助詞ヨ・ネ」『月刊言語』、1993年4月号
- 白川博之（1992）「終助詞「よ」の機能」『日本語教育』77号
- 杉藤美代子（1989）「終助詞「よ」の意味・機能とイントネーション」『講座日本語と日本語教育第1巻日本語学要説』明治書院
- 曹再京（2000）「終助詞「よ」の機能」『言語科学論集』第4号、東北大学文学部
- 田中彰（2001）「終助詞「よ」のイントネーション・パターン分析——疑問／平叙との比較・その選択の談話への依存——」『麗澤大学大学院言語教育研究科年報』第3号
- 田野村忠温（1994）「終助詞の文法」『日本語学』、1994年4月号
- 陳常好（1987）「終助詞 話し手と聞き手の認識のギャップを埋めるための文接辞」『日本語学』、1987年10月号
- 仁田義雄・益岡隆志・田窪行則（2002）『新日本語文法選書4 モダリティ』くろしお出版
- 日本語記述文法研究会（2003）『現代日本語文法4 第8部モダリティ』くろしお出版
- 橋本修（1992）「終助詞「ね」の、意味の型とイントネーションの型」『日本語学』、1992年11月号
- 蓮沼昭子（1995）「対話における確認行為「だろう」「じゃない」「よね」の確認用法」『複文

の研究 下』くろしお出版

日高吉隆（1995）「終助詞「よ」の意味・用法とイントネーション」『創価大学別科紀要』第9号，1995年12月

益岡隆志（1991）「終助詞の「ね」と「よ」の機能」『モダリティーの文法』第2章，くろしお出版

森山卓郎（1989）「終助詞「ね」のイントネーション——修正イントネーション制約の試み」『講座 日本語と日本語教育 第1巻 日本語学要説』明治書院